



2005年4月28日(木)

...

御祓川の再生と周辺のまちづくりを目的に会社を設立

——石川県七尾市の中心市街地を南北に流れる御祓川(みそぎがわ)は水質汚濁が進み、中心市街地もかつての賑わいを失いつつあったと聞きます。御祓川の清流と周辺の賑わいを取り戻すことは、現地住民にとって最大の課題です。こうしたことから、1999(平成11)年に(株)御祓川を設立されたということですが。森山——1998(平成10)年の暮れに設立の準備を始め、1999年6月に民間のまちづくり会社としてスタートしました。もともと七尾



(株)御祓川 チーフマネジャー

森山 奈美 氏

MORIYAMA Nami

では、港を中心としたまちづくりとして「七尾マリンシティ構想」を進めていました。その成果の1つとして「能登食祭市場」や、駅前に再開発ビル「パトリア」ができました。その中心市街地の2つの核を結んで軸にしていこうと考えたときに、軸上にあったのが水質汚濁の進んだ御祓川でした。次のステップに行くためには、川の浄化が必要ということで、七尾市市街地中心部を流れる御祓川の再生と、その周辺のまちづくりを目的としてつくったのが、(株)御祓川です。

——百パーセント民間出資の株式会社として設立されたのはなぜですか。やはり主体性ということですか。森山——そうですね。私は経営者ではなくスタッフですが、出資者にとってはやはり「自己責任でやるんだ」ということを示すということはありません。よくなぜNPOではないのか、と聞かれますが、メンバーは皆、会社の経営者ですから、会社のつくり方は知っていました。しかし、当時NPO法ができたばかりで、NPO法人のつくり方を知らなかったということもあります。NPOであるか株式会社であるかの違いは、上がった利益を配分するかしないかの違いしかありませんから、社会的な株式会社ということでは、

NPO とほぼ同じだと思っています。

「川の日」ワークショップでグランプリを受賞

——具体的にはどのような事業を行っているのでしょうか。

森山——事業の柱は大きく分けて3つあります。1つは御祓川の浄化に関わる事業。2つ目が界隈の賑わい創出に関わる事業、3つ目がコミュニティ再生に関わる事業です。

御祓川の浄化では、御祓川浄化研究会という共同研究体を主宰しています。弊社が事務局をもち、石川県と七尾市、それに市民団体や学識経験者、企業など、産官学民の共同研究体をつくり、御祓川の水質浄化方策を検討しています。

弊社では、イベントのノウハウはありますが、浄化の技術はありません。そこで、企業に案内を出し、「御祓川浄化技術ワークショップ」を開催しました。それがきっかけで共同研究に結びつきました。現在は、浄化実験を行っており、昨年やっと御祓川方式といえるような浄化システムの原形が完成しました。

次に界隈の賑わい創出ですが、川沿いに店を並べ、賑わいを出し、まちの側から川を再生して



インタビュアー

会誌編集委員
三溝智美

いくというものです。その中には、直営店もあり、收入的にはこれがメインになっています。1号館と2号館がありますが、1号館の御祓館は旧十二銀行の建物を再生して整備されました。また、直営店のほかに、テナントを誘致し、魅力的な店舗づくりのプロデュースなども行っています。

3つ目のコミュニティ再生の中心になっているのは、NPOの「川への祈り実行委員会」の事務局です。そのなかで、イベントとして「排水路対抗! 御祓川浄化大会」を行いました。発生源対策として、油ものは流さないようにしましょうとか、拭き取ってから洗いましょうとか、呼びかけはしてもなかなか広がりません。そこで、排水路ごとにチームを組んで、一定期間でどのくらいきれいになるか競うことにしました。こうした取り組みにより、「川の日」ワークショップで、川への祈り実行委員会がグランプリを受賞しました。

自治力が上がってけば、地域の課題は解決していけます

——御社は民間まちづくり会社のなかでも、特に活躍されている企業として注目されていますが、成功の秘訣はどこにあるのでしょうか。

森山——成功しているかどうかは現時点ではわかりませんが、港や川というように、やるべき軸をきちんと決め、それに対する理論武装もして、なぜ今川なのか答えられるストーリーをきちんと描いているということがあるのではないのでしょうか。そうした言葉が明確になればなるほど、いろいろな人に受け入れられやすくなります。

御祓川の場合は、「イエ・ミセ・マチの関係を再生する」ということをずっと言っています。個人でもまちの問題に自ら関わり、解決していける。あるいは店が良くなるということ、まちが良くなるということと同じだということを、実証していく。たとえば、今「御祓川」というお酒をつくっても、川がこのような状態では売れません。でも、「手取川」は石川を代表するお酒として売られています。まちの力によって、そのお店の企業活動が支えられているということを、企業経営者が認識をし、まちに対して、資金も出すし労力も出す。そのことは、継続することで自分の企業の文化になっていくはずです。そうすれば、その企業があることが、まちにとっての資源になっていくという関係ができます。そういう関係を再生していくのが、私たちの目指しているところ

です。

——七尾市に限らず、今後人口が減少するなかで、機能的でコンパクトなまちづくりが必要といわれていますが、どのようなビジョンをおもちでしょうか。

森山——昨年10月に1市3町が合併し、七尾市としても地域が広がりました。それをきっかけに始めた取組みに「あるもの探し研究会」があります。これは旧市町の在所や地区を見直そうというもので、合言葉は「ないものねだりから、あるもの探しへ」。地域に当たり前にある「あるもの」をよそから来た風の人と地元の案内をする土の人で掘り起こして活かしていく。風の人があることで初めて地元にある良いものが見えてくるということがあります。各地でやっているあるもの活かしの活動を少しずつ紹介し、交流し合おうという取組みです。もちろん新しい公共への仕組みづくりも大切ですが、地域内の交流を活性化させ、自治力が上がっていけば、地域の課題を解決していく能力もアップしていくはずです。全体の数が減っても、一人ひとりの暮らしが、いきいきとしていくのです。

——本日はどうもありがとうございました。